

鉱床探査家の七つ道具—カチヨ

金鉱床の探査をしていて、金があるかないかを調査現場ですぐに判定できる道具があれば、どれだけ便利かと思うことがある。その魔法の道具がカチヨである。

カチヨ(cacho)というのはラテンアメリカ特有のスペイン語で牛の角を意味する。文字通り牛の角を半分に切ったもので、椀かけの道具として用いられる(写真1)。通常砂金掘りに使う木椀は面積が大きく多量の土砂を処理できるが、鉱床探査家が使うカチヨは、金の存在の有無を調べるのが目的なので、持ち運びに便利な手のひらよりもやや大きい程度のサイズである。カチヨの底に残った砂金が見やすいように色の黒いものが重宝される。写真2はホンデュラスで会った山師で、2-3ppm以上の含有量であれば、金を検出する自信があると言う。石英脈や珪化岩の酸化部を削り取り、試料をハンマーで軽く砕いてカチヨを前後に揺らし椀かけを行う(写真3)。1試料5分もかからず金の有無が判別される。水の無い所へは、水をペットボトルに入れて行き、1リットルも水を使わないで見事に金を検出する腕前を持っていた。



写真2 カチヨを使って金の探鉱をしている山師。



写真1 カチヨ。牛の角を半分に切ったもの。



写真3 カチヨを使って椀かけをしているところ。